

大学生における随伴性自尊感情とソーシャルスキルの関連について

山川 日菜多・山口 祐子

問題

自尊感情とは

自尊感情は、心理学の中でもっともよく用いられる重要な概念のひとつであり、自尊感情、セルフ・エスティームをキーワードとした文献検索では、実に膨大な研究の蓄積があることが判明している(遠藤, 2000)。そもそも、人間の持つ自尊感情とは、自尊、自己受容などを含め、人が自分自身についてどのように感じているのか、その感じ方のことであり、自己の価値と能力に関する感覚および感情であるとされている(内田・上埜, 2010)。

一般に、自尊感情の高い人は対人関係においても不安や緊張が低く、とらわれを持つことなく他者を受容しようと考えられている(小塩, 1998)。しかし、日本人の自尊感情は海外に比較して低く、また、近年低下傾向にあることが指摘されている(小塩他, 2014)。加藤・中島(2011)の調査からは、自尊感情と養育態度の関係から、自尊感情の高い親ほど好ましい養育態度であることが示唆され、親の自尊感情の高さはその養育態度に関連し、さらには子どもの自尊感情に影響を与えることが分かっている。このことから、自尊感情の高低は、本人だけではなく、その子どもや周囲の人間にも影響を与えるものであると言えるだろう。

随伴性自尊感情とは

自尊感情は、一つの概念としてだけでなく、自己感覚が対人関係や期待などによって生じる随伴性自尊感情と、より安定し、固定された自己意識に基づいた真の自尊感情の2つに分けられると考えられており、前者は不適応的、後者は適応的とされ、この2つは区別する重要性が指摘されている(Deci & Ryan, 1995)。実際に、これまでの多くの研究では真の自尊感情が人々に正の影響を与えるという結果が出ている。伊藤・小玉(2006)も、随伴性自尊感情が高ければ、自尊感情を確保するため、外的基準上での達成行動に縛られることとなり、その為に自己自身による決定が難しくなると考えられるとしていた。しかし、その後の調査の結果として、随伴性自尊感情は、不適応的な面もある一方で自己をより良くしていこうとする意識につながる能動的な面も備えていることも明らかとなっている。石原(2020)も、随伴性自尊感情は周囲の外的な評価に左右されやすい特徴があるため、他者に認められているという実感があることが、精神的健康を保つ上で重要な要因となっていると考察している。

ここで、随伴性自尊感情と真の自尊感情という2つの自尊感情が不適応的なものと適応的なもの両極端に単純に

分けることができるものであるのかということに疑問が生まれる。他者と接触することがほとんどの場合避けられない今の社会では、他者から受ける影響は本人にとって非常に大きなものがあるはずである。その影響はポジティブな面もあればネガティブな面もあるであろう。人々が対人関係の中で自身の価値というものを否定し、抑うつ的な気分押しつぶされることなく、より良い精神的健康を保って生きようとするためには、他者とのコミュニケーションにおいて自身の自尊感情を維持し、向上させていこうしなければならないのではないだろうか。本研究で随伴性自尊感情の不適応的な面だけでなく、適応的な面も新たに見つけ出すことができれば、今後の研究に貢献できる結果となるかもしれないと考えられる。

笹川(2015)は、随伴性自尊感情は大きく分類して、他者に勝ることで得られる優越感、周囲の人から認められ、信頼される随伴性で得られる他者評価、他者の意見に左右されず自分独自の在り方を大切にする随伴性で得られる独自性の3つが存在するとしており、それらが主観的幸福感と関連があることを述べた。この主観的幸福感とはいくつかの構成要素で成り立っており、自己受容、論理的柔軟的認知、問題処理行動、自己実現目標、他者接触活動の5つが挙げられている(根建・田上, 1995)。

他者接触活動

他者接触活動は、言い換えればコミュニケーションであるとも考えられる。コミュニケーションは対人場面において非常に重要なものであるが、コミュニケーションは、聞く・話すだけではなく、相手との関係性やその場の雰囲気等の判断も重要である(栗田他, 2012)。石井(1996)は、社会的であることと人間関係の豊かさが主観的幸福感に正の関係があると考えている。また、藤井(2021)も、友人や仲間といった身近な人との関係が主観的幸福感に強く関わっているということを研究から明らかにしている。人と接することそれ自体に精神的健康を向上させる効果があると言えるだろう。そのため、本研究では、その1つである他者接触活動に注目していきたいと考える。

また、主観的幸福感の構成要素が他にもある中で、他者接触活動は唯一自分以外の他者の存在が必要な活動であり、多くの人にとって生活に欠かせない行動であると考えられる。それはすなわち、他者の存在や態度、行動で左右される随伴性自尊感情に最も直接的に関係が見られるものではないかとも思われる。そのため、随伴性自尊感情との関連を調べるために、他者接触活動は主観的幸福感

の構成要素の中でも今回特に取り上げたい要素となっている。また、上記の理由から主観的幸福感に最も大きな影響を及ぼしている構成要素は他者接触活動であると言えるのではないだろうかとも考え、同時に検討していきたいものとなっている。以上のことから、他者との関わりによって影響されると考えられる随伴性自尊感情は主観的幸福感を向上させると言うことが可能性として挙げられるだろう。しかし、具体的にはどのように他者と関わるのが随伴性自尊感情に影響を与えるのかは明らかでない。

ソーシャルスキル

そこで、対人関係を考える上でソーシャルスキルという概念を用いるのが適切ではないかと考える。相川(2009)によると、ソーシャルスキルとは、ほかの人に対する振る舞いやものの言い方のことである。また、ソーシャルスキルは社会的スキルとも言われ、対人関係で相互作用する者同士の不満を残さないようにするために、お互いの利益をうまく調整し、折り合いをつけていくことを可能にする技能でもある(相川・津村, 1996)。McCrosky & Richmond(1996)によると、ソーシャルスキルは主張性スキルと反応性スキルの2つに分けることができる。主張性スキルとは、自己の要求を示しつつ積極的に議論し、肯定的または否定的な個人の権利と感情を表現しながら会話を開始、維持し、他者を攻撃することなく自分自身のために主張する能力である(McCrosky & Richmond, 1996)。また、反応性スキルとは、他者とのコミュニケーションに敏感に反応し、聞き上手で、他者を快適にし、他者の要求や欲求を認識する能力である(McCrosky & Richmond, 1996)。主張性スキルは対人場面において適切な自己表現を行うためのスキルであり、一般的に、主張性スキルが高く素直な自己表現を行うことは精神的適応の良好さと関連するとされている(渡部, 2013)。反応性スキルはその内容から共感的な能力とも考えられ、松尾(2002)は、暴力やいじめの問題において共感性の感情的側面に焦点を当てたプログラムを実施し、他者と感情を共有できる特性を身につけさせることも効果的であると推察する。このように、同じソーシャルスキルでありながらも、主張性スキルと反応性スキルは違うものと言える。

また、ソーシャルスキル全体としても、谷村・渡辺(2008)の研究では、大学生が初対面でコミュニケーションをスムーズに行うためには、ソーシャルスキルを高めることが必要であることが明らかにされており、その重要性が窺える。また、ソーシャルスキルトレーニングという言葉やプログラムがあるように、ソーシャルスキルは、教育的側面などにおいても積極的に身につけたい能力として認識されていると言えるだろう。武蔵(2012)も、ソーシャルスキルの量的な不足が精神的な不健康や対人関係のとりこに与える影響を与え、ソーシャルスキルの量的な充足が他者との関係性における自信となっていると述べている。本研究では、ソーシャルスキルに関する研究の中でも門田・寺崎(2005)が分類した主張性ス

キルと反応性スキルの二側面から調査することとする。

目的

以上より本研究では、他者の存在や評価によって左右される随伴性自尊感情と、個人にとって良い対人関係を構築する要素になるであろうソーシャルスキルとの関連を明らかにし、随伴性自尊感情に影響を与える対人関係の在り方を検討することを目的とする。先行研究の中でもソーシャルスキルの獲得は精神的健康や、対人関係といった社会を円滑に過ごす術を身に着けることにつながることから(武蔵, 2012)、随伴性自尊感情においても良い効果があるのではないだろうか。そのため、以下の仮説を設定する。

仮説1.主張性スキルが低い人より高い人の方が優越感や独自性、他者評価が高い。

仮説2.反応性スキルが低い人より高い人の方が優越感や独自性、他者評価が高い。

方法

調査対象者

近畿圏内の大学の大学生117名(男性30名、女性86名、回答しない1名。平均年齢19.92歳、 $SD = 0.94$)であった。

調査時期

2022年10月に実施した。

調査内容

- 1)デモグラフィック項目:性別・年齢を尋ねた。
- 2)ソーシャルスキルを測定する質問紙「対人相互作用記録用紙」(12問目)(門田・寺崎, 2005)が作成した主張性スキル、反応性スキルの2因子、全19項目「非常に当てはまる」「少し当てはまる」「あまり当てはまらない」「全く当てはまらない」からなる4件法。
- 3)随伴性自尊感情を測定する質問紙「自尊感情尺度」(笹川, 2015)が作成した優越感、他者評価、独自性の3因子、内容が重複している項目を1項目除いた全11項目の「あてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」からなる4件法。

調査手続き

授業時間を用いてGoogleフォームによる質問紙調査を行った。

分析方法

因子分析、二要因分散分析。

倫理的配慮

調査への参加は任意であり、回答しないことへの不利益は生じないこと、データは研究終了後に消去し、個人情報の保護に最大限配慮すること、研究以外の目的には使用しないことを事前に説明し、同意を得た。

結果

因子分析

門田・寺崎(2005)の対人相互作用記録用紙(12問目)の

19項目について主因子法による因子分析を行った。因子分析を行った理由として、先行研究が2005年とデータが古いこと、再度検討することとした。先行研究に基づき2因子を抽出し、プロマックス回転を行った。その結果、因子負荷量.40以下である項目が一つ消去された。その後再び因子分析を行い、二因子とも概ね先行研究と同様の結果であったため、因子名も先行研究に基づき第一因子を「反応性スキル」、第二因子を「主張性スキル」とした(Table 1)。

次に、笹川(2015)の自尊感情尺度の11項目について主因子法による因子分析を行った。こちらは、重複する質問項目を一つ消去したため、因子分析をかけることとした。先

行研究に基づき3因子を抽出し、プロマックス回転を行った。その結果、因子負荷量.40以下である項目が一つ消去された。その後、再び因子分析を行い、三因子とも概ね先行研究と同様の結果であったため、因子名も先行研究に基づき、第一因子を「優越感」、第二因子を「他者評価」、第三因子を「独自性」とした(Table 2)。

調査で得られた回答ではそれぞれ、ソーシャルスキルを測定する質問紙では「非常に当てはまる」を4点、「少し当てはまる」を3点、「あまり当てはまらない」を2点、「まったく当てはまらない」を1点とし、随伴性自尊感情を測定する質問紙では「あてはまる」を4点、「ややあてはまる」を3点、「あまりあてはまらない」を2点、「あてはまらない」を1点とし、得点として換算した。その後、反応性スキルと主張性スキルの個人の得点をそれぞれ高群と低群に分けるために平均値を算出したところ反応性スキルの平均点が30.14($SD = 3.94$)、主張性スキルの平均点が21.36($SD = 4.59$)となった。また、その他の変数は優越感の平均点が7.66($SD = 3.21$)、他者評価の平均点が6.81($SD = 2.24$)、独自性の平均点が7.77($SD = 2.10$)となった(Table 3)。

ソーシャルスキルと優越感との関連

主張性スキルと反応性スキルをそれぞれ平均点で高低に分け、それらを独立変数、優越感を従属変数とする対応のない二要因分散分析を行った。その結果、交互作用は認められなかった($F(1, 113) = 0.05, n.s., \eta_p^2 = 0.00$)。主張性スキルの主効果が有意であった($F(1, 113) = 8.12, p < .01, \eta_p^2 = 0.07$)。主張性スキルが低いことより、主張性スキルが高いことのほうが優越感が高いことが明らかとなった。一方、反応性スキルの主効果は有意でなかった($F(1, 113) = 0.84, n.s., \eta_p^2 = 0.01$)。

ソーシャルスキルと独自性との関連

主張性スキルと反応性スキルをそれぞれ平均点で高低に分け、それらを独立変数、独自性を従属変数とする対応のない二要因分散分析を行った。その結果、交互作用

Table 1
対人相互作用記録用紙(12問目)の因子分析結果

	I	II
17. 温かい態度で接する。	.77	.03
9. 相手を思いやるような態度をとる。	.74	.07
3. 相手の手助けになるように振舞う。	.68	.10
19. 友好的に振舞う。	.65	-.06
4. 誠実な態度で接する。	.63	.11
6. 相手の気持ちに合わせて振舞う。	.62	-.22
2. 優しい態度で接する。	.58	.00
5. 相手の気持ちに共感する。	.56	-.12
16. 相手の気持ちに敏感である。	.45	.10
13. 相手を説得しようとする。	.05	.78
7. 自分の意見を積極的に言う。	.20	.72
1. 自分の言い分を主張する。	-.01	.62
8. 相手に対して、不満や怒りを示す。	-.24	.60
15. 相手を責める。	-.33	.57
14. 自信のある態度で接する。	.35	.50
10. 自分の気持ちを素直に表す。	.21	.50
18. 相手と競い合うような態度をとる。	-.25	.48
12. 自分の考えは曲げない。	-.05	.46
因子間相関	I	II
	I	-.13
	II	-

Table 2
自尊感情尺度の因子分析

	I	II	III
3. 私は世間一般人よりも優れた資質を持っている。	.95	-.09	.05
4. 私は周りの人に比べて高い能力を持っている。	.93	-.01	.02
2. 私は他の人に比べて優れていると思う。	.92	.07	-.05
1. 私は普通の人以上に魅力があると思う。	.79	.13	-.03
6. 自分は周りから信頼されていると思う。	.01	.90	-.05
7. 自分は周りの人から評価されていると思う。	.02	.80	.10
5. 自分は世間一般から認められていると思う。	.03	.74	-.02
10. 周りに合わせるよりも自分らしさを大切にしている。	.02	-.01	.90
11. 他人からの評価ではなく自分の考えに従って生きている。	-.10	.07	.74
9. 一般的な価値観よりも自分の独自性を大切にしている。	.09	-.07	.67
因子間相関	I	II	III
	I	.61	.37
	II	-	.32
	III		-

Table 3
各尺度の平均値と標準偏差

	平均値	標準偏差
主張性スキル	21.36	4.59
反応性スキル	30.14	2.54
優越感	7.66	3.21
他者評価	6.81	2.24
独自性	7.77	2.10

は認められなかった($F(1, 113) = 0.06, n.s., \eta_p^2 = 0.00$)。主張性スキルの主効果が有意であった($F(1, 113) = 17.41, p < .001, \eta_p^2 = 0.13$)。主張性スキルが低いことより、主張性スキルが高いことのほうが独自性は高いことが明らかとなった。一方、反応性スキルの主効果は有意でなかった($F(1, 113) = 0.10, n.s., \eta_p^2 = 0.00$)。

ソーシャルスキルと他者評価との関連

主張性スキルと反応性スキルをそれぞれ平均点で高低に分け、それらを独立変数、他者評価を従属変数とする対応のない二要因分散分析を行った。その結果、交互作用に有意ではなかった($F(1, 113) = 3.62, n.s., \eta_p^2 = 0.03$)。主張性スキルの主効果が有意であった($F(1, 113) = 7.55, p < .01, \eta_p^2 = 0.06$)。一方、反応性スキルの主効果は有意でなかった($F(1, 113) = 3.55, n.s., \eta_p^2 = 0.03$)。

考察

本研究では、ソーシャルスキルを反応性スキルと主張性スキルの2つに分け、それぞれのソーシャルスキルを獲得することが、随伴性自尊感情の優越感、独自性、他者評価の3つにそれぞれ差があるかどうかについて調べるため、大学生117名に質問紙による調査を行った。反応性スキルと主張性スキルのそれぞれの特徴や利点による随伴性自尊感情の変化を理解しやすくすることを可能にするために、ソーシャルスキルを反応性スキルと主張性スキルを平均点で分け、ソーシャルスキルと優越感・独自性・他者評価との関連について考察する。

主張性スキルと随伴性自尊感情の関連について

優越感では主張性スキルの主効果が有意であった。次に、独自性も主張性スキルの主効果が有意であった。また、他者評価においても主張性スキルの主効果が有意であった。これらのことから、主張性スキルが低い人より高い人の方が優越感や独自性、他者評価が高い、といった仮説は支持された。

優越感に関する結果として、寺島・小玉(2007)は、人は誇大化した自己評価を確認するために、他者から注目・賞賛されたいという欲求が高まり、あえて自己の優越性をアピールすることで、他者から良い評価を引き出すような操作に至ると述べている。この自己の優越性をアピールするという部分は主張性スキルとして考えられ、そのスキルが高いほど伝えたい意見を主張しやすく、相手の印象にも残るため、その分他者からの評価を得やすくなるのではないかと考えられる。町田(2009)も、明るい雰囲気や積極的にコミュニケーションをできる人は、相手から不快な言動を向けられたり、このことより相手と衝突することによるストレスを感じる頻度も少ないとしている。主張性スキルが高いと、それだけコミュニケーション相手からのネガティブなフィードバックを避けやすくなることができると考えられる。また、大学生はコミュニケーション力とは会話の能力や積極性、または良

好な関係構築力であると考えており(小川, 2010), 荒川他(2021)も、コミュニケーション能力の向上に関与する構成要素は「話の内容が魅力的」、「社交的・積極的/フレンドリー」であると述べている。このことよりコミュニケーション力の内容には、主張性スキルが認識として含まれていると考えることができるだろう。つまり、主張性スキルが高く、積極的にコミュニケーションが取れ、対人関係が円滑な傾向にある者は、そうでない者より優越感を感じやすいのではないかと考えられる。優越感について、小平(2002)は、優越感・有能感の低さによってとらえられる「自分は肯定的ではない」という慢性的な感覚は、落胆と関連した感情の経験しやすさの準備的な状態を提供するとしている。このことと本調査の結果からも、優越感が高めるべき自尊感情であると言えるのではないだろうか。

独自性に関する結果としては、佐野・黒石(2005)は、周囲との調和を保つことに重きを置く日本では、个性的であることよりむしろ多くの他者と同じで変わっていないこと、つまり「ふつう」であることを志向すると述べている。独自性とは、言い換えれば他人とは違う自己のユニークさである。佐野他(2013)の調査では、「ふつう」という語が指す内容については、ありふれているが平和な日々や周囲の人たちと同じであること、平均や真ん中を挙げる人が多く、否定的なエピソードは全く語られず、このことは「ふつう」という語それ自体には望ましい意味も望ましくない意味も含まれるが、「ふつう」とは何かを問われると、その意味内容は望ましい事柄となっていることを示していた。これらを踏まえ、日本人にとって他者と違う存在であることは特別視され、誰もから望まれるものではなく、むしろ社会生活を円滑に送るために、周りに合わせることを重要としている日本では、独自性は積極的に高めたいものではないと言えるのかもしれない。「ふつう」ということが平均や真ん中の意味で捉えられているにもかかわらず、否定的な印象がないことが、それこそ「ふつう」を良いと認識している根拠になっているのではないだろうか。そのため、「ふつう」が好まれる価値観から独自性を高めるには自身の意見などをアピールする能力である主張性スキルを高く持つ必要があると考えられる。また、優越感に比べ、独自性については自尊感情として適応的であると言えるかは未だ不明である。その理由として、前述の先行研究の通り、日本人は「ふつう」であることを志向する傾向にあり、独自性が高いということがそのままメリットとして捉えられにくいのではないかと考えられる。独自性はそれが高い本人にとっては良いものであっても、他者からみれば疎まれる対象になる可能性がある。そのことは社会生活を円滑に送るという点においては不適応と言えるのかもしれない。

他者評価に関する結果として、岡田・永井(1990)は、大学生の時期においては、自己を評価する基準として他者からの評価を主に用いているとしている。優越性を他者から引き出すように、主張性スキルが低いと他者から自身への良い評

価を得られにくいと考えられる。つまり、他者から自身に対するフィードバックをより多くもらうためには、積極的な自己アピールが必要となると考えられる。

反応性スキルと随伴性自尊感情の関連について

優越感では反応性スキルの主効果が有意でなかった。次に、独自性も反応性スキルの主効果が有意ではなかった。また、他者評価においても反応性スキルの主効果が有意ではなかった。これらのことから、反応性スキルが低い人より高い人の方が優越感や独自性、他者評価が高い、といった仮説は支持されなかった。このように、全体として反応性スキルの高い人は随伴性自尊感情が高いという結果とならなかった理由として、以下のことが推察される。反応性スキルとは、コミュニケーションにおいて、聞き上手で、他者を快適にするものであり、他者の要求や欲求を認識する能力であることから(McCrosky & Richmond, 1996)、社会生活の中の対人関係を円滑にすることには非常に有用であるものの、随伴性自尊感情のように他者から影響されるものを高めるのには不向きである可能性が考えられる。また、お互いが発言することによって得られるであろう評価が得づらいのではないだろうか。

まとめと今後の課題

本研究の結果から、優越感については、主張性スキルが高く、積極的なコミュニケーションを行うことができる者はそうでない者より優越感を感じやすい、独自性については、自己のユニークさを求めない日本人が独自性を高めるためには、主張性スキルが必要となる、他者評価については今回の結果からソーシャルスキルにおける完全性は求められていないと考えられる。これまでの考察から、随伴性自尊感情の解釈について今後改めて考え直す必要があると思われる。しかし、本研究では随伴性自尊感情に適応的な面があることが結果からも明らかとなった。本研究で得られた見解を基に質問内容を改良し、再調査を行えば新しい視点の発見が見つかるのではないだろうか。

本研究の結果から、主張性スキルを獲得することは随伴性自尊感情を構成する優越感や、独自性、他者評価を高める。他方で、反応性スキルの獲得は、随伴性自尊感情に変化がないことが明らかとなった。主張性スキルと反応性スキルの異なる点として、前者は相互性が見受けられ刺激に反応をしようが、後者は他者からの刺激を受け止めることが重視される。つまり、随伴性自尊感情が高まる要因というのは、他者から即時的に反応を得ることではないだろうか。

今後の課題として、序論では、随伴性自尊感情は主観的幸福感に関連があり、主観的幸福感の構成要素の一つである他者接触活動が最も大きな要素であると述べたが、本研究の結果からは実際に他者接触活動であるソーシャルスキルが結果として主観的幸福感に最も大きく影響しているとは断言できないだろうと思われる。そのため、今後は他者接触活動そのものが人々の主観的幸福感にどれほど

影響を与えているのかについて質的な調査方法を加え、詳しく調べていく必要があると言えるだろう。

引用文献

- 相川 充(2009). 新版人づきあいの技術—ソーシャルスキルの心理学—サイエンス社.
- 相川 充・津村 俊充(1996). 社会的スキルと対人関係:自己表現を援助する 誠信書房.
- 荒川 大地・町田 真彦・橋詰 倫典・古田 貴久(2021). コミュニケーション能力を向上させるには 芸術・技術・体育・生活科学(編) 群馬大学共同教育学部紀要, 56, 119-124.
- Deci, E.L. & Ryan, R.M.(1995). Human autonomy: The basis for true self-esteem. In M. H. Kernis (Ed.), *Efficacy, agency, and self-esteem*. New York:Plenum, 31-46.
- 遠藤 由美(2000). 「自尊感情」を関係性からとらえ直す 実験社会心理学研究, 39, 150-167.
- 藤井 恭子(2021). 日本の大学生における主観的幸福感の規定要因 皇學館大学「日本学業叢」, 11, 107-108.
- 石原 由梨奈(2020). 受容的認知及び自尊感情が主観的幸福感に及ぼす影響—自尊感情の随伴性に注目して— 甲南女子大学大学院論集, 18, 23-32.
- 石井 留美(1996). 主観的幸福感の動向 コミュニティ心理学研究, 1, 94-207.
- 伊藤 正哉・小玉 正博(2006). 大学生の主体的な自己形成を支える自己感情の検討—本来感, 自尊感情ならびにその随伴性に注目して— 教育心理学研究, 54, 222-223.
- 門田 昌子・寺崎 正治(2005). パーソナリティと主観的幸福感との関連—対人相互作用におけるソーシャル・スキルの役割— 川崎医療福祉学会誌, 15, 67-74.
- 加藤 悠・中島 美那子(2011). 母親の自尊感情と養育態度—子どもの自尊感情を育むために— 茨城キリスト教育大学紀要, 45, 119-130.
- 小平 英志(2002). 女子大学生における自己不一致と優越感・有能感, 自己嫌悪感との関連—理想自己と義務自己の相対的重要性の観点から— 実験社会心理学研究, 41(2), 165-174.
- 小塩 真司(1998). 青年の自己愛傾向と自尊感情, 友人関係のあり方との関連 日本教育心理学研究, 46, 280-290.
- 小塩 真司・岡田 涼・茂垣 まどか・並川 努・脇田 貴文(2014). 自尊感情平均値に及ぼす年齢と調査年の影響—Rosenbergの自尊感情尺度のメタ分析— 教育心理学研究, 62, 273-282.
- 栗田 智美・内野 悌司・小島 奈々恵・岡本 百合・磯野 典子・三宅 典恵・仙谷 倫子・林 マサ子・弘津 由・二本松 美里・吉原 正治(2012). 大学生のコミュニケーション行動と意識の調査 総合保健科学:広島大学保健管理センター研究論文集, 28, 43-49.
- 町田 佳世子(2009). コミュニケーション能力, ストレス対処, 意欲の関連 札幌市立大学研究論文集, 3, 35-44.
- 松尾 直博(2002). 学校における暴力・いじめ防止プログラムの動向—学校・学級単位での取り組み— 教育心理学研究, 50, 487-499.
- McCrosky, J.C. & Richmond, V.P.(1996). Communication competence. *Fundamentals of human communication: An interpersonal perspective*, 90-93.
- 武蔵 由佳(2012). 大学生におけるソーシャルスキルと大学適

- 応との関連 盛岡大学紀要, 29, 57-64.
- 根建 由美子・田上 不二夫(1995). 主観的幸福感に関する展望 カウンセリング研究, 28, 203-204.
- 小川 一美(2010). 大学生にとってのコミュニケーション力とは 電子情報通信学会技術研究報告. Hcs, ヒューマンコミュニケーション基礎, 109, 17-18.
- 岡田 努・永井 徹(1990). 青年期の自己評価と対人恐怖の心性との関連 心理学研究, 60, 386-389.
- 佐野 予理子・黒石 憲洋(2005). 独自性欲求及び「ふつう」認知が精神的健康に及ぼす影響 国際基督教大学学報, 47, 61-66.
- 佐野 予理子・黒石 憲洋・生異 裕子(2013). 面接からみえてきた「ふつう」の意味 清泉女学院大学人間学部研究紀要, 10, 21-30.
- 笹川 果央理(2015). 自尊感情が主観的幸福感へ及ぼす影響の検討—自己価値の随伴性からの整理 パーソナリティ研究, 24, 112-1123.
- 谷村 圭介・渡辺 弥生(2008). 大学生におけるソーシャルスキルの自己認知と初対面場面での対人行動との関係, 56, 364-375.
- 寺島 瞳・小玉 正博(2007). 他者を操作することに影響を及ぼす個人内要因の検討 パーソナリティ研究, 15, 313-322.
- 内田 知宏・上埜 高志(2010). Rosenberg自尊感情尺度の信頼性および妥当性の検討—Mimura&Griffiths訳の日本語版を用いて— 教育心理学研究, 58, 257-266.
- 渡部 麻美(2013). 大学生が望ましいと考える自己表現—達成動機・親和動機・他者意識との関連— 31, 63-80.

Relationship between Concomitant Self-Esteem and College Students' Social Skills

Hinata YAMAKAWA and Yuko YAMAGUCHI

Abstract

This study was designed to elucidate the connection between concomitant self-esteem, which is contingent upon the presence and evaluation of others, and social skills, encompassing interpersonal abilities. The study operationalized accompanying self-esteem through the dimensions of superiority, uniqueness, and evaluation of others, whereas social skills were categorized into reactive and assertive domains. Two hypotheses were formulated: (1) assertiveness skills influence dominance and uniqueness, and (2) reactivity skills influence peer evaluation. A questionnaire survey was conducted among university students (N =117) to test these hypotheses. The results revealed a significant main effect of assertiveness skills on superiority and uniqueness, supporting Hypothesis 1 and suggesting that assertiveness skills are necessary to enhance the uniqueness of individuals who do not seek to be unique. Additionally, the main effect of assertiveness skills was significant in evaluating others. Conversely, Hypothesis 2 was not supported due to a significant trend in the interaction effect, with significant simple main effects in the low assertiveness skill and the low reactivity skill group. These findings shed light on the adaptive aspects of concomitant self-esteem. Given the questionnaire survey's limited dataset, future research should incorporate additional qualitative methods employing open-ended questions and interviews to explore these relationships further.

Keywords: concomitant self-esteem, social skills, subjective well-being